

話し言葉における英語の now と日本語の「いま」

西山 淳子

1. はじめに

英語と日本語の現在の時の副詞は、発話時間である現在の時間を指し示し、修飾する事象を時間軸上の現在の時点に置く。しかし、下の例文 (1) から (4) を見ると、現在の時の副詞である英語の now と日本語の「いま (今)」は必ずしも発話の時間 (つまり現在) を指すわけではない。

- (1) Kevin lives in Osaka now.
- (2) *Kevin finished his homework now.
- (3) 洋子はいま京都に住んでいる。
- (4) 「いま、またおやじのこえがした。」「いま？なんにもきこえやしなかったじゃないか。」
(堀辰雄『風立ちぬ』) (高橋 1985 : 182)

例文 (1) と (2) が示すように、話し言葉では、英語の now は現在時制で自然に聞こえるが、過去時制では不自然に聞こえる。一方で、例 (3) と (4) が示すように、日本語の「いま (今)」は現在時制の「る」形と過去時制の「た」形のどちらでも自然に聞こえる。そのため、「いま (今)」の辞書項目には、英語の just now や a moment ago に相当する「少し前に」という意味も挙げられている。¹⁾

その一方で、英語の now は次の例 (5) に見られるように、物語過去と言われる過去の語りの文脈の中で、過去形の文を修飾することも知られている。そのような now は、指示詞とみなされ、代名詞のように照応関係から (Kamp 1971, Kamp and Reyle 1993)、あるいは、談話構造に基づいて談話関係から議論されている (Hunter 2012, Altshuler 2016)。

- (5) Only a faint, sweet scent lingered on. Then Toby had awakened. It had only been a dream, a wonderful dream! But, somehow he knew Victoria was happy now. She was with her parents again. She was no longer an orphan. And neither was Toby!
(COCA) (以降、下線は筆者による)

しかし、now と同様に、日本語の「いま」を照応関係や談話関係から分析すると、(1)-(4) の話し言葉の文脈で見られる違いについては説明できない。これらの副詞の対照言語学的な議論はあまり行われておらず、西山 (2023) は両者を捉える意味を提案したが、日本語の「いま」は過去の「た」形と共起できるが、英語の now は過去時制では不自然に聞こえることについては語用論で解決されとした。従って、本稿では、now と「いま」が話し言葉で文脈なしに現れる用例 (直示用法) に焦点を置き、これらを対照分析し、その違いを語用論的に説明する。つまり、now と「いま」

の意味は同じであるとみなし、その用法の違いを時制・アスペクトの尺度推意 (scalar implicature) (Levinson 2000) を使って説明を試みる。

2. 現在の時の副詞 now と「いま」

まず現在の時の副詞 now と「いま」の使われ方の違いと共通点を簡単に挙げる。英語の now には、主に直示的用法、照応的用法、談話的用法がある。上記の例 (1) が直示的用法となり、話し言葉で now は発話時間を直接指すとみなされる。上記の (5) や次の (6) は照応的用法となり、主に過去の物語の中で、先行して現れる文の出来事や状態が基準とする時間を参照し、now はその物語内時間を指す。(6) では、Bill が帰ってきた時間を基準とし、now は過去の時間を指している。例 (7) は談話的用法となり、文頭に現れた now は、話題を転換する談話機能を持つ (Schiffrin 1987)。ここでは、話題が she で指し示される女性一般に関する内容から、発話者に関する個別の話題に転換する。西山 (2017) は、3つの now の用法を全て同じ時間的意味で捉え、文頭の now の談話機能については情報構造から語用論的に分析している。

(6) Bill had come home at seven. Now he was writing a letter. (Kamp and Reyle 1993 : 596)

(7) So I em ... I think, for a woman t'work, is entirely up t'her. If she can handle the situation.
Now I could not now: alone. (Schiffrin 1987)

日本語の「いま」も、話し言葉で現れる直示的用法と過去の語りで現れる照応的用法が観察されている (西山 2023)。次の (8) と (9) はそれぞれ直示的用法と照応的用法の例である。(8) では、「いま」は「食べた (過去形)」、「食べている (非過去・進行形)」、「食べる (非過去)」の全ての時制と共起することができ、いずれも話し言葉で自然な発話となる。(9) では、物語が過去時制で語られ、「今」は物語時間を指している。

(8) 私はいまバナナを {a. 食べた b. 食べている c. 食べる}。

(9) あの時の「おれが死んだら」は単純な仮定であった。今私が聞くのは、いつ起こるかわからない事実であった。(夏目漱石『こころ』)

物語内時間を指す照応的用法の (9) の2文目の文頭「今」は、英語の now のような話題の転換という談話機能も持つ。「あの時の」で表される時の物語内の主人公の回想から、主人公が語っている物語時間に場面が変わる。ただし、例 (7) のように時間的意味と談話機能を合わせ持つ now と時間的な意味だけを持つ now が1つの文に共起する例は、日本語の「いま」については見当たらない。日本語の「いま」と比較して、英語の文頭の now は、談話標識としての機能がより定着しているように思われる。

前節で述べたように、これらの例で見られる now と「いま」の大きな違いは、話し言葉で使われる直示用法では、now は過去形と共起できないが、「いま」は過去形と共起できるという点である。次の (10a-b) の対比が示すように、英語の now は、適切な文脈がなければ、話し言葉で過去

時制と共起すると不自然な発話となるが、非過去（未来形や現在形）と共起したときは自然な発話となる。対照的に、「いま」は非過去と共起するだけでなく、例（11）と（12）にも見られるように、タ形と共起し、自然な発話となる。例（11）と（12）は所謂「発見のタ」と呼ばれる「タ」形と共起している例である。

- (10) a. #The sun now stood above the hippodrome.
 b. The sun will now stand/is now standing above the hippodrome. (Altshuler 2016, 2020)
 (11) いま鍵を失くした。
 (12) いま鍵がここにあった。

これらの now と「いま」の用法の違いをまとめると、表1のようになる。現在時制と will などの法助動詞を伴う未来時制をまとめて非過去とした。また「いま」の談話用法は照応用法と重複するため、(○) としている。²⁾

表1: now と「いま」の用法

	直示用法		照応用法	談話用法
	過去	非過去	過去	過去・非過去
now	×	○	○	○
いま	○	○	○	(○)

3. 英語の now の意味と談話構造分析

過去時制の文に now が現れる際の自然さは用法や文脈によって異なり、談話関係から分析されている (Hunter 2012; Altshuler 2016, 2020)。それらの談話分析は日本語のタ形と「いま」の共起可能性にも部分的に応用することは可能であると思われるが、表1に見られるような直示用法における now と「いま」の対比を説明することはできない。

Altshuler (2016, 2020) によると、過去時制の文の now は先行する文脈の参照時間を指し示すため、指すことができる参照時間の有無が自然さの違いとなる。先行文脈なしに発話された過去時制の文と now が共起すると、指し示す参照時間がないので、不自然な発話となる。例えば、(10a) (= (19)) は、(20) のように埋め込まれると、過去時制でも now が自然に聞こえるのは、now が指し示すことができる時間が先行する文脈に存在するからである。ここでは、(20) には (21) a-b で表される事象が含まれており、b の事象を修飾している now は、a で記述される事象の参照時間を指し示している。

- (19) #The sun now stood above the hippodrome. (= (10a))
 (20) Pilate raised his martyred eyes to the prisoner and saw how high the sun now stood

above the hippodrome, how a ray had penetrated the arcade.

(M. Bulgakov, *The Master and Margarita*) (Altshuler 2016, 2020)

- (21) a. Pilate raised his martyred eyes to the prisoner. (σ_1)
 b. The sun now stood high above the hippodrome. (σ_2)

分節談話表示理論 (Lascarides and Asher 1993, Asher and Lascarides 2003) に基づき、Altshuler は、now が指すことができる参照時間の有無は記述されている事象間の談話関係によって左右されるとする。(21) a と b の事象は *Background* という談話関係を成し、(22) のような時間関係が成立する。つまり分節 σ_1 と σ_2 の間に *Background* の関係が成立するなら、それぞれの分節で記述されている事象 e_{σ_1} (ピラトが殉教者の目を囚人に向けた) と e_{σ_2} (太陽が円形競技場の上に高く登っていた) の時間は重複する。例えば、次の (23) a-b では、二つの分節の間に成立する談話関係が *Explanation* となり、now が修飾する he hit me という事象 (e_β) は先行文脈にある事象 I hit him (e_α) の説明となり、(24) の時間関係に従い、時間的には先行することになる。つまり、he hit me が時間的に先に起こり、その後で I hit him が起こる。そのため、he hit me を修飾する now は先行する時間文脈に指し示す参照時間がないことになる。そのため、(20) と同様の埋め込まれた過去時制節ではあるが、(23) b に現れる now は不自然となる (Altshuler 2016, 2020)。

(22) *Background*(σ_1, σ_2) $\Rightarrow \tau(e_{\sigma_1}) \circ \tau(e_{\sigma_2})$ (Lascarides and Asher 1993)

(23) a. I hit him because he hit me.

b. # I hit him because he now hit me. (Altshuler 2016 : 28)

($e_\alpha = \text{I hit him}, e_\beta = \text{he hit me}$)

(24) \emptyset *Explanation*(α, β) $\Rightarrow (\neg e_\alpha < e_\beta)$ (Asher and Lascarides 2003 : 160)

Altshuler はこれらの過去の語りの文脈における now の用法に焦点を絞り、ライヘンバッハ流の基本的な時制概念 (発話時、参照時、出来事時の時間関係) に沿って、now の意味要件を (25) のように定義する。

(25) now の意味要件

now 文 φ が真となる条件は、以下を満たす参照状態 s と参照出来事 e が存在することを必要とする：状態 s は出来事 e の結果状態であり、状態 s の時間痕跡は時制で表される参照時間 t と重なる ($\tau(s) \circ t$) (Altshuler 2020)

参照時間 t は、現在時制では発話時間に一致し、過去時制では発話時間に先行し、記述事象の事象時間と重なる。now は指示詞として、過去の物語内の参照時間 t を指し示す。そして、この (25) の定義によると、now が現れ、参照時間 t を指すためには、状態 s と出来事 e が存在しなければならない (Altshuler 2016, 2020)。そして重要なことは、Altshuler (2016, 2020) では、now が修飾する節と談話内の他の分節単位との間に、上記の *Background* や *Explanation* のような談話関係が一つ以上成立しなければならないという制約が加えられる。そして、状態 s , 出来事 e , 時間 t の

値はその談話関係に基づく時間関係によって決められる。そうすると、話し言葉で現れる直示用法の now は、先行する文脈がなく、now が修飾する事象は談話関係を持たないので、この意味分析の対象から外れることになる。

直示用法の now では、now 文で表現される状態が成立しない時間が、発話時の前に存在することを前提としている (Ismail 2001 : 77)。例 (26)–(28) では、それぞれ not dead から dead へ、not over から over へ、not red から red への変化の出来事が前提とされており、now が修飾しても自然に聞こえる。しかし、(29) とその否定文 (30) はいずれも総称表現であり、状態変化の出来事を前提としないため now が修飾すると不自然に聞こえる。日本語でも同様の現象がみられ、(31) のような総称的な表現を「いま」で修飾すると不自然な文となる。そして、(32) では、「以前は京都に住んでいない時があった」、あるいは「Kevin が京都に住んでいる」状態の始まりの出来事 (引越など) があることが now の前提となるが、2 つ目の文でみられるように、前提の部分をメタ言語的に否定することができる。

(26) His grandfather is dead now.

(27) The Vietnam war is over now.

(28) The litmus paper is red now.

(29) *Whales are mammals now.

((26)–(29) : Ismail 2001 より微修正)

(30) *Whales are not mammals now.

(31) *いま魚の血が赤い。

(32) “Kevin lives in Kyoto now.” “No, he doesn’t live in Kyoto now, because he was born and raised in Kyoto and has always lived there.”

つまり、現在時制の直示的な用法で、now 文が先行文脈なしに発話される時、参照出来事 e は、発話の文脈に明示的に存在しなくても、話者と聴者の間では前提とみなされると考えられる。そのため、たとえ現在形であっても、状態の始まりの出来事を前提としないような永遠状態 (つまり、総称表現) を、now や「いま」が修飾すると不自然となる。

西山 (2023) では、過去の語りの文脈の now に加えて、直示用法の now と日本語の「いま」にも応用するために、Altshuler による now の意味要件 (25) を修正した。下記の (33) は、それをさらに修正した定義である。

(33) now (および「いま」) の意味要件 (修正版)

now (および「いま」) 文 ϕ が真となるためには、以下を満たす状態 s が存在する :

i) 前提 : 事象 e が存在する。

ii) 状態 s は事象 e の結果状態に相当し、状態 s の時間痕跡は時制で表される参照時間 t と重なる ($\tau(s) \circ t$)。

Altshuler の定義 (25) では、now 文に必要とされる参照状態 s と参照出来事 e の位置付けに違いが見られないが、それを修正した (33) では、now、または「いま」、で修飾される節が真となる

ために必要な出来事 e は前提となる。そのため談話や会話の文脈の中に明示的に出来事が現れる必要がない。これにより、現在時制で現れる直示用法の now を説明することができる (西山 2023)。

このように Altshuler の now の意味定義を修正することで、西山 (2023) は物語過去の now の用法だけではなく、直示用法の now を説明し、それを日本語の「いま」に応用し、「いま」の用法も説明した。しかし、(33) の定義では、まだ直示用法の now と「いま」が過去時制で現れる際の自然さの違いを説明することが出来ない。次節では、尺度推意を用いて now と「いま」の違いを分析する。

4. 時制と相における尺度推意

時制と事象の解釈について、過去時制と現在時制は、(34) のように尺度推意のペアを成す可能性が示唆されている (Musan 1997, Levinson 2000, Altshuler 2016)。特に、状態文に関しては、状態が現在に成立するならば、それは過去に向かっても伸びており、それゆえ現在時制の状態は過去時制の状態を含意するとしている。そして、過去時制の状態文の使用は Q 推意をもたらし、現在時に至る前に、状態が停止していることが推意される。つまり、過去時制での状態記述は、Q 推意により現在時制の状態記述の否定を含意するとされる (Musan 1997, Altshuler 2016)。その例が (35) である。例 (35) では、過去時制で記述された状態 (I loved you.) は現在の時点では、もはや成立しておらず、すでに停止しているという Q 推意が働いている。そして、その推意を後続文 (I still do.) が取り消している。

(34) < the past, the present > (Musan 1997, Altshuler 2016)

(35) I loved you. I still do. (Q 推意: \neg I love you) (\neg は否定の意)

しかし、現在時制の状態が過去時制にも成立すると考えられるなら、物語の文脈でも同様に状態の時間の拡張が起こると思われるが、英語の物語過去の文脈では、状態の成立する時間より前に遡って、先行する事象の参照時間まで、必ずしも状態の時間は遡らない。例えば、次の (36) では、pitch dark (真っ暗) の状態は、先行の Max が電灯のスイッチを消すという出来事のすぐ後に (“just after”) 更新された参照時間 (Partee 1984) に重なり、その出来事時間そのものには重ならない³⁾。つまり、2 文目で記述された状態は、1 文目の出来事のすぐ後から始まり、先行時間に遡って伸びていないと解釈される。

(36) Max switched off the light. It was pitch dark. (Asher and Lascarides 2003)

(37) *I love you. → I loved you.

また、(37) で示すように、英語の過去形の状態文と現在形の状態文の間に意味的 (論理的) 含意は成立しない。つまり、I love you と言えるなら、必ず I loved you と言えるか、というと必ずしもそうとは言えない。英語の現在形と過去形が、尺度推意のペアを成すとしても、それは際立った (salient) 対比に対して認可される臨時的な尺度 (nonce scale) の尺度推意となる (Hirschberg 1991)。

意味的含意関係に基づく時間的な尺度推意としては、むしろ (38) のように過去形文と現在完了形文の間に成立すると考えられる (西山 2011)。

(38) < the past, the present perfect >

(39) I have been in school. → I was in school.

(40) Ken has written a novel. → Ken wrote a novel.

(41) Ken has fallen down. → Ken fell down.

例 (39) から (41) に見られるように、記述事象の出来事・状態に関わらず、いずれも現在完了形は過去時制で表された同件事象を意味的に含意することができる。(39) では現在完了形で I have been in school と言えるなら、必ず I was in school とも言える。このように過去時制と現在完了形は意味的含意の尺度ペアを形成するので、(39)' で示すように、過去時制文の使用は、I was in school と言っているなら、I have been in school ではない、つまり、現在までずっと学校に居ないだろうという Q 推意 (Levinson 2000) をもたらし、情報的により強い意味を持つ現在完了形文の否定が推意される。

(39)' I was in school. (Q 推意: \neg I have been in school.)

(42) I have been in school now.

(43) Ken has fallen down now.

ここで Q 推意によって否定されるのは、完了状態の存在である。完了状態は状態化の機能を持つ完了形によって発話時現在に導入される状態である。現在完了形文では、現在に先行する時間に事象 (出来事か状態) が導入され、現在時にその完了状態あるいは結果状態が導入される。そのため、(42)-(43) のように now は現在その状態が成立していることを表すことができる。⁴⁾

しかし、この推意は日本語の過去の「タ」形の状態文には当てはまらない。日本語の過去形は「た」形で表され、現在完了に相当する助動詞は「ている」である。しかし、(44) の例からも分かるように、「ケンが小説を書いている」からと言って、必ずしも過去の「た」形文である「ケンが小説を書いた」ことを意味的に含意しない。「ている」は進行形と現在完了の解釈を持ち、漠然性を有するため、「ている」文と「た」文は意味的含意関係を持たない (Nishiyama 2006)。そのため尺度推意のペアを形成しないのである。英語との対比を (45) で示す。

(44) ケンは小説を書いている。↔ ケンは小説を書いた。

(45) a. 英語 < 過去, 現在完了 >

b. 日本語 * < た, ている > (意味的含意の尺度の欠如)

このように、英語に見られる < 過去, 現在完了 > に相当する尺度含意のペアが日本語には欠けているため、「タ」形の状態文は Q 推意を引き起こさない (Nishiyama 2011)。例 (46) は「発見のタ」とも呼ばれるタ形の用法だが、Q 推意「いまはもう財布はない」は引き起こされず、過去形で記述

された「財布がある」状態は、現在の発話時まで継続していると解釈される。

(46) 財布があった。(*Q 推意: ¬財布がある)

「発見のタ」の用例では、記述された状態は過去時制で表される参照時間と重複し、発話時間に先行するが、発話時間まで記述状態は継続し、参照時間の値も更新されない。参照時間は、その談話と関連のある出来事が参照時間に導入された時に更新される (Partee 1984)。また、Levinson (2000) は観察的事実として、(47) に示すように Q 推意は I 推意に優先し、Q 推意は I 推意を妨げると論じている。尺度推意のペアを形成しない日本語の「タ」形の使用は、Q 推意を誘発しないため、I 推意を阻まない。I 推意は語用論増幅 (pragmatic enrichment) とも言われ、聞き手が話し手の発話の未特定の情報を補う推論である。それゆえ、(48) では、過去の状態は何も無ければ、そのまま継続するため、現在まで継続して成立しているという I 推意が得られ、「いま」との共起が可能となる。

(47) Q 推意 > I 推意

(Levinson 2000)

(48) いま財布があった。(Q-推意なし / I 推意: 財布がある (s).)

過去の状態文だけではなく、出来事事象を表す文についても、過去の「タ」形の使用による Q 推意は誘発されないため、相反する文脈がなければ、現在の状態についての I 推意を阻まない。それゆえ、現在、雨が降った結果状態にあると容易に I 推意され、(50) のように「いま」が共起することが可能となる。

(49) 雨が降った。

*Q+ > ¬There is a resultant state of the event of raining.

I+ > There is a resultant state of raining.

(50) いま雨が降った。(I+ > There is a resultant state of the event of raining holding now)

このように、日本語の過去の「タ」形は現在完了形と意味的含意の尺度を形成しないため、「タ」形で導入された事象の完了状態、または、結果状態が現在に成立するという解釈を否定する Q 推意が起らない。そのため、I 推意が阻まれず、「タ」形文では、「いま」は容易に過去の前提となる事象と I 推意を通じて発話時間に成立する状態を得て、修飾することができる。

5. むすび

本稿では、英語と日本語の現在の時の副詞の用法の違いを Levinson (2000) の尺度推意を用いて分析した。英語と日本語の現在の時の副詞 now と「いま」の直示用法では、過去時制との共起性に違いがみられるが、指し示す時間的範囲の違いは英語と日本語の時制とアスペクトの構造分布的な違いに基づいて形成される尺度推意の違いによって説明できることが分かった。本分析で直示用

法における両副詞の違いは説明可能だが、未来に起こる事象を修飾する now と「いま」については扱っていない。これらは法性も関わることとなり、今後の研究課題としたい。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 #20K00665 の助成を受けたものであり、第 40 回日本英語学会秋季大会のシンポジウムで発表した内容に基づいて、加筆修正したものである。

注

- 1) 『大辞泉第二版』(2012)
- 2) 談話標識の機能を持つ英語の文頭の now は、口語で頻繁に現れ、直示的に発話時間を指すと捉えることもできる。一方、日本語の文頭の「いま」は、書き言葉で頻繁に現れ、語り手の物語時間を指し、話し言葉で話題を転換するときは、副詞「さて」などが使われる。
- 3) 参照時間の更新については Partee (1984) を参照。
- 4) 西山 (2011)、Nishiyama (2006) を参照。

引用データ

夏目漱石『こころ』青空文庫（電子版 2012 年）

参考文献

- Asher, Nicholas and Alex Lascarides. 2003. *Logics of conversation*. Cambridge University Press.
- Altshuler, Daniel. 2016. *Events, States and Times*. Berlin: De Gruyter.
- Altshuler, Daniel. 2020. Tense and Temporal Adverbs: “I Learned Last Week That There Would Now be an Earthquake.” In *The Wiley Blackwell Companion to Semantics* (eds D. Gutzmann, L. Matthewson, C. Meier, H. Rullmann and T. Zimmermann). <https://doi.org/10.1002/9781118788516.sem005>
- Hirschberg, Julia. 1985. *A theory of scalar implicature*. New York: Garland Publishing Inc.
- Hunter, Julie. 2012. Now: A discourse-based theory. In *Logic, language and meaning*. 371-380. Springer, Berlin, Heidelberg.
- Ismail, Haythem O. 2001. *Reasoning and Acting in Time*. State University of New York at Buffalo. Ph. D dissertation.
- Kamp, Hans. 2013. Formal properties of ‘now’. In *Meaning and the Dynamics of Interpretation*. 11-51. Brill.
- Kamp, Hans, and Uwe Reyle. 1993. *From Discourse to Logic, Part 1, 2*. Dordrecht: Kluwer Academic Press.
- Lascarides, Alex, and Nicholas Asher. 1993. Temporal interpretation, discourse relations and commonsense entailment. *Linguistics and Philosophy* 16. 437-493.
- Levinson, Stephen C. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge: MIT Press.
- Nishiyama, Atsuko. 2006. *The Semantics and Pragmatics of the Perfect in English and Japanese*. State University of New York at Buffalo. Ph. D dissertation.
- Nishiyama, Atsuko. 2011. English and Japanese Stative Expressions in the Past. *JELS Vol. 27*, 197-206
- 西山淳子 2017. 「英語の現在の時の副詞 now の意味と様々な用法」『和歌山大学教育学部紀要—人文科学』67 号 頁 107-112.
- 西山淳子 2023. 「日本語と英語の現在の時の副詞の意味と用法」『和歌山大学教育学部紀要—人文科学』73 号 頁 107-112.
- Partee, Barbara. 1984. Nominal and temporal anaphora. *Linguistics and Philosophy* 7. 243-289.
- Schiffrin, Deborah. 1987. *Discourse Markers*. New York: Cambridge University Press.
- 高橋太郎 1985. 『現代日本語動詞のテンスとアスペクト』国立国語研究所

(和歌山大学教育学部准教授)

Now and Ima in Spoken English and Japanese

by

Atsuko Nishiyama

The English and the Japanese present-time adverbs *now* and *ima* can both refer to the utterance time and modify the eventuality holding at present in spoken language. However, the Japanese *ima* can also occur in past-tense utterances out of the blue and be interpreted as ‘a moment ago,’ whereas the English *now* cannot. Nishiyama (2023) modifies Altshuler’s (2016, 2020) meaning of *now* in past narrative discourse and applies it to the deictic uses of *now* and *ima*, but it does not explain the contrast between them. This paper provides a pragmatic analysis of the difference between *now* and *ima* in their deictic uses. Although the past and the present tense have been suggested to form a scalar pair and bring about the cessation implicature of a state described in the past at the present time (Musan 1997, Altshuler 2016), Nishiyama (2006, 2011) discusses that the past tense forms a semantic scale with the present perfect, not with the present, leading to the scalar implicature of the cessation of a past state in English, and that the scalar implicature is unavailable in Japanese. This paper shows that the difference between *now* and *ima* can be explained via the difference in the scalar implicature available in the tense and aspect systems in English and Japanese.